

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520474

研究課題名（和文） 平曲譜本の音形とアクセント—諸本の比較と整理

研究課題名（英文） Sound Change and Accents in Heikyoku (The Tale of the Heike) Scores: Comparison and Study of Various Scores

研究代表者

奥村 和子 (OKUMURA KAZUKO)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：80264787

研究成果の概要（和文）：

研究対象として用いられることの多い代表的な『平家正節』2本について、その濁点注記や送り仮名表記等について比較を行ったところ、より古いものと考えられる尾崎本で「当時において複数の読み方が考えられる場合、また一般的に少数形とされる場合に注記が付される」という傾向が顕著に見られた。すなわち、自明のものには注記がなかったと考えられ、このことから、注記のない箇所の子音の想定が可能となる。

研究成果の概要（英文）：

Dakuten (sonant mark) annotations, okurigana (kana suffixes added after a Chinese character) notations, etc. were compared in two representative and frequently studied Heike Mabushi (Authentic Melody of the Tale of the Heike) scores. The comparison revealed a clear trend “to add annotations for words which at the time could have multiple readings or for those kana suffixes which were considered to be less common” in the Ozaki score, which is thought to be the older of the two. This indicates that annotations were not added where the reading of a word was considered obvious, a fact which also makes it possible for us to infer the readings of words with no annotations.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：平曲譜本

1. 研究開始当初の背景

平家物語を語るための譜が記されている、いわゆる平曲譜本は、その譜に南北朝～近世期の京都アクセントが反映されていると考えられること、またその他にも様々な発音注記が施されていること等から、当時の日本語の発音を知る上で貴重な資料とされる。しかしながら、それら発音注記のうち濁点については、個々の語の清濁判定に用いられる（『日本古典文学大系本平家物語下』等）ことはあっても、譜本においてどのような場合に付されているかについてはあまり言及されることがない。象徴的なものが『平曲譜本の研究』における次のような記述である。曰く、「《割る・清む・詰める・呑む等の注記がわざわざ付けられるのは、譜本当時の中央語がその様な発音でなかった証拠」という考え方を強くうち出す」が、それに対して「フリカナや濁点など或程度一般的に認められる注記は、この様な解釈が難しい」。現代でも用いられる注記であること、数が多いこと等が調査言及されにくい一因となっているようである。とはいえ、濁点がすべての濁音に付されているわけではないことから、同書で「やはり《他の訓み方もあり得るといふ様な問題語形》に付される事が多かったと言えよう」とも述べられており、漢字に付されたものも含め、数ある濁音のうち、どのような場合に濁点が付されるのかを明らかにすることは、当時の語の読みを推定する上で有益な作業であろうと考えられる。

また、今回主な調査対象として考えている『青洲文庫本平家正節』と『尾崎家本平家正節』とは本文が非常に似ているのであるが、「青洲文庫本の第一の強みは、本文と譜が読みやすいことである」（『青洲文庫本平家正節解題』）と言われるように、青洲文庫本には読むための様々な工夫が施されている。濁点もその一つと考えられ、尾崎家本と比して2倍を超える数の濁点が見られる（巻一）。とすれば、その濁点を付す方針もおそらく2本間で異なるのであって、これを同じに扱って平家正節の特徴として述べることはできない。渥美かをる氏、金田一春彦氏らによる議論のある2本の関係を論じる上でも、詳細な調査は必須と考える。

また、もう一つの研究対象である動詞音便については、写本におけるそれは、諸本による本文異同が多いこと、また音便を起こしているか否かが本文解釈にほとんど影響を与えないことが、本来の本文を定めることを困難にすると共に、その研究の意義を軽んじられることともなっていると思われる。だが、中世期においては覚一本平家物語での調査をもとに出雲朝子氏が音便の男女による使い分けを指摘され、これをふまえた拙稿では

身分による差について考察を行った。中古期資料における使用実態（ウ音便と待遇表現との関わり）とも考え併せると、音便を起こしているか否かが本文解釈に影響することも有り得るのであって、その実態調査を行なうことにより当時の状況を把握することも必要と思われる。

近世期以降についてはテキストの確定もしやすいため、音便について言及する論考も数多く、原形と音便形の使い分けについては、湯澤幸吉郎氏、柳田征司氏、坂梨隆三氏、蜂谷清人氏ら多くの先学により、音韻・音声、文体（発話者等の位相、場面状況等）、語彙的等様々な要因が指摘されている。しかしながら、それらの相互関係については分野の相違もあり、あまり考察が行われていないのが現状であろう。特に音便は二語の結合度が深まった結果現れる現象と考えられるわけだが、二語の一語化はえてして複数の音韻変化を伴う。動詞活用形のアクセントが判明する資料の出現する近世期の特徴を生かし、研究代表者が従来テーマとしてきた平曲資料におけるアクセント研究と、連濁も含めた上記調査結果とを関連付けることにより、その関係について考察を行う。

2. 研究の目的

平曲譜本が日本語史上において貴重な資料とされる所以であるところの「譜記への京都アクセントの反映」及び「発音注記の豊富さ」を生かして当時の音韻を考察するとともに、平曲諸譜本の先後関係にも言及するべく

- 平曲譜本の発音注記について譜本間の異同の整理、データベース化
 - その整理結果を元にした音形とアクセントとの関係の考察
- を中心に研究を行なう。

濁点は、声点をその起源とすると考えられることもあり、漢字の音や仮名に付されることが多い。而して現在では仮名にのみ付されるのが一般的となっているわけだが、平曲譜本等では漢字の訓読みにも付される。このことはすなわち、一般に漢字に隠れてしまって判断し辛い和語の連濁の有無（少なくとも有）について言及できることを意味している。また、譜本の濁点がどのような基準で付されているかを明らかにすることにより、当時の発音の推定にも役立つと考えられる。更に、その用いられ方や連濁の有無等により譜本間の先後関係についても触れたい。

音便について、活字化されている覚一本平家物語の音便については研究もいくつかあるが、影印のみの譜本については本文検討そのものがまだほとんど及んでいない状態である。ほぼ同じ本文で音便に異同があれば、その違いの意味には当然着目すべきである

う。譜本における音便の状況を徹底調査することにより、従来の研究において明らかにされてきた中世期平家物語の活字本、近世期近松浄瑠璃等における動詞音便の起こる傾向やその担う意味といったものとの比較を行い、その

○平家物語において、女性はあまり音便形を用いない

○同様に、男性でも身分の高い人物はあまり音便形を用いない

○ハ行四段動詞についてはウ音便とともに促音便が現れ、その用いられ方に限定があること

といった傾向が一致するかどうかの確認を行なうとともに、調査対象とした2本の性格にせまりたい。

前述の如く、数が多いが故にその付される基準がはっきりわかっていない（かと言って濁音すべてに付されているわけではない）譜本の濁点を徹底調査することにより、その用いられ方の基準（ひいては当時の音韻）を明らかにすること、また、それを利用した連濁や音便の調査により、譜本の性格に言及できるであろうこと等が意義としてある。更に、連濁や音便、アクセントについて、相互の関係を考察することに関して、多く、研究分野が音韻・文法・語彙等で区切られることとも関係するのであるが、それぞれの分野で語彙、音韻、文体的考察等、様々な研究が行われているにも関わらず、それらを相互に関連付けて考察することは、手間が倍かかることでもあり、あまり手が付けられていない部分である。

3. 研究の方法

平曲譜本において、連濁・音便といった二語の一語化による語形（音形）変化とアクセントとの関連を考察するべく、資料の調査考察を行う。

具体的には、初年度に本文の酷似する『青洲文庫本平家正節』と『尾崎家本平家正節』とにおける濁点の用いられ方について調査を行い、平家正節において濁点はどのような場合に付されたのか（そしてどのような場合に付されなかったのか）を探り、一覧をデータ化する。次年度に、同資料を用いて動詞音便形について調査及びデータ化を行い、従来の中古・中世・近世期における動詞音便の研究結果との比較検討を行なう。3年目については、それら本文・発音注記の特徴とそれに対応する墨譜との一覧から、音形とアクセントとの関係を考察する。

4. 研究成果

(1) 論文「平曲譜本の音便表記——青洲文庫本平家正節と尾崎家本平家正節(2)——」

尾崎本と青洲本という本文や譜記の酷似

する平家正節2本における濁音表記と音便表記の特徴について調査、整理と分析を行い、以前の調査結果とあわせ、次のようなことを述べた。

尾崎本において、濁点や振り仮名などが付されるのは、当時において複数の読み方が可能であって注記がなければどの読み方をすればよいか分からない場合が多い。また、動詞の連用形に「て・たり」が下接して音便形・非音便形の複数の語形の可能性が有り得る場合に、その語尾の仮名が送られるかどうかについては、少数形であって注記がなければ別の読み方がなされていたと考えられる場合に送り仮名が付されるという傾向が見られた。すなわち、注記がついていない、また送り仮名が付されないものは、当時においてそれらがなくともどのように読むかが自明のものであった、ということになる（ただし、たとえば濁点については、漢字や振り仮名については以上のような傾向が見出されるものの、本文中の仮名についてはかなり網羅的に付され、現代の用法に近くなっている、といった違いも見られる）。

一方の青洲本については、まず本文そのものはやはり尾崎本と類似点の多いことが確認された。すなわち、尾崎本と青洲本とで濁音と清音（単に濁点がないというだけでなく、スムという発音注記により積極的に清音であることが示されるもの）とが食い違う、もしくは音便の有無が異なる、といった例は、皆無ではないが、ほとんど見られない。

而して、青洲本におけるそれら発音注記・表記の傾向を見ると、これも尾崎本と似た傾向は見られるが、明らかに当時自明のものであったと考えられるものであっても注記が付される例がかなり多く認められる。その時代その地域の言語の知識がなくとも読めるような工夫がなされているわけであって、これは尾崎本と青洲本とが用いられた時代及び地域の違いが反映したものであろうかと考えられる。

これらの傾向からすると、注記のない部分であっても、当時の様相、また同本の他の部分の読みからある程度その読みを推測することが可能となる。

(2) 論文「Introduction of Documents: Heike monogatari (The Tale of the Heike) Belonging to the Osaka Prefecture University Library」(資料紹介：大阪府立大学図書館蔵『平家物語』)

研究代表者の所属する大阪府立大学図書館に所蔵される平曲譜本について、本文や譜記の酷似する京都大学蔵『平家物語波多野流節付語り本』と比較しながらその特徴を述べた。

その本文の京大本との類似点は、誤った表記と考えられる箇所まで一致するものであ

り、2本の深いかかわりを思わせる。また、京大本が完本であるのに対して、府大本は巻1～巻3までは揃っているが4冊目はいくつかの章段を抜き出したものになっている、という構成からして、府大本の巻1～巻3は京大本から書写された、もしくは同じ本をもとに写されたものと考えられる。このことは京大本（もしくはこれに準じる本）が波多野流譜本として、当時広く用いられていたことの証左のひとつになると言えよう。

なお、府大本の4冊目については、本文や譜記は京大本と共通しており、やはり波多野流譜本を写したのと考えられるが、3冊目までに比べて字配り等の相違点がかかなり多く見られ、直接の書写関係は考えづらいものとなっている。また、波多野流では「白声(素声・白音とも)」という曲節における譜記は記さないことが多いのであるが(音楽性がない曲節である白声では、当時の京都アクセントそのままに語ればよいと、京都で行われた波多野流譜本には自明のものとして記さない傾向がある)、府大本では譜記ばかりでなく、自明のものでない振り仮名も省かれる傾向にある。府大本の4冊目の書写者はこのあたりの事情をあまり把握していなかったものと考えられる。

なお、この論文については大阪府立大学蔵本を広く紹介するため、英文とした。

(3) データベースの作成

尾崎本及び青洲本において

①濁点注記…濁点が付されている語を、その文字種(仮名・振り仮名・漢字)別にまとめたもの、及び、当時濁音であった可能性があるにもかかわらず濁点が付されていない箇所、についての一覧

②発音注記…「スム」「ツメ」「ノム」等の発音注記が、どのような語の、どのような音韻状況において付されているかの一覧

③「四段動詞連用形+て、たり」形…動詞連用形部分における音便の有無(もしくは判定の可・不可)、その動詞の活用行、拍数、アクセント類別、用いられた箇所の地の文と会話文・和歌の別、会話文においては発話者、発話状況といった諸条件と、その譜記(に反映したアクセント)の対応

について、網羅的なデータベースを作成した。ただし、期間中にはすべての調査を終えることができなかつたため、現在も調査を継続している。今後、随時更新を行い、完成次第、CDでの希望者への配布を予定している。またその成果を論文として発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 奥村和子、「平曲譜本の音便表記——青洲文庫本平家正節と尾崎家本平家正節(2)——」、言語文化学研究日本語日本文学編、査読無、8号、2013年、pp.1-12

② Kazuko OKUMURA、「Introduction of Documents: Heike monogatari (The Tale of the Heike) Belonging to the Osaka Prefecture University Library」、言語文化学研究日本語日本文学編、査読無、6号、2011年、pp.1-12

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥村 和子 (OKUMURA KAZUKO)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：80264787